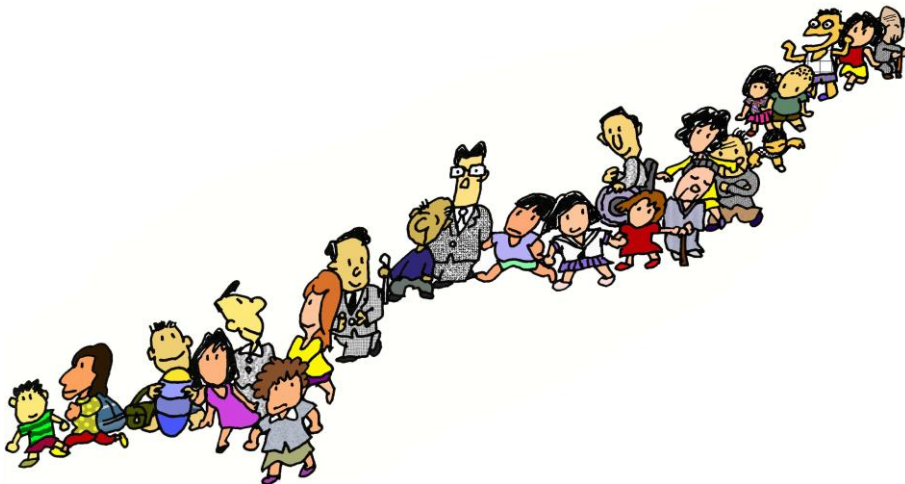


Family

History

(2)

団士郎／団いどむ



第1回目を書いてみて、こんなペースを進めると終わらないほど膨大なことになる予感がした。そんな詳細なわが家のヒストリーなど、誰が関心あるものかと思う。私自身も半分は我が家のファミリーヒストリーだが、もう半分はどう調べれば、どこで宝の山に遭遇できるのかに惹かれている。そういう作業が一番苦手な私は、得意とする次男の調査報告が楽しみだ。

*

刻々、きざみ続けられているのがファミリーヒストリーだなんてことぐらいわかっていた。しかし最新のヒストリーが妻の七十歳での死だとは考えもしなかった。配偶者の死は中高年男性にとって、最大のストレスであると耳にする。だが今のところ私には、あまり実感が無い。寂しいことではあるが想定内の事態であり、長く連れ添えばそれがいつ起きるかは誰にもわからない。

自分にそんな事は起きないなどと非科学的な信念さえ持たなければ、ああ、それが今日だったのか、早いなあ。でも47年間、他人同士が婚姻継続してきたんだものなあと考えられるのも年の功だろう。

人はとかく、自分だけは別だと思いたがる。だから何か起きてしまった時、過剰に精神的反応をする

のではない。生まれたとは必ず死ぬものとして存在するということだ。そこに約束された時間も順序もない。おおむね最長でも 100 年ほどの生物であると理解していたら、長い短いもその範囲内。今何歳だろうと、それまでの人生がさかのぼって短くなる事はないのだから、40 年、50 年、60 年、70 年、そこまでに何ができたかを己に問えばよいことだ。

第二回

次男が調べたことを、延々と書いてゆくつもりはない。私にとって発見というか、歴史のつながりや重なり面白さが実感される出来事。私の個人史が近代日本史と重なっていること。あるいは人の営みが昔からそれほど大きく変化しているわけではないことが、明らかになれば面白いと思って書いている。変わることに、変わらぬことの狭間で私たちは 100 年足らずの物語を生き、そして死ぬ。

*

2020年9月27日、妻の四十九日法要を済ませた。我が家にとっては古い習慣である法事後の「かねよ」。食事会を大津・逢坂山大谷にあるうなぎ料亭で実施した。

開業百数十年と書かれているが、我が家が利用し始めてからも百年近い。私が生まれる前から、大津で商売をしていた祖父や、その上の代にも馴染みの店だ。その席での挨拶で、11人の出席者に向けて私はこう話した。

「ここは今から五十年ほど前、典子と私が結婚することになり、双方の親の顔合わせを設定したときに使った店です。ここの小部屋で私の両親と典子の両親が顔合わせました。はじめての経験で、そこそこ緊張していた記憶があります。

その時の六人のうち五人がもう亡くなりました。五十年をそれほど長い時間だとは思いますが、現実はある時の顔ぶれが、今は私一人になっているほどの時間でもあります。そう思うと人の世の新陳代謝は、想像よりはるかに早い感じがします。ことさらそれを悲しいとも不安だとも思いません。私にとっての次の世代、そしてさらにその次の世代がもう中学生になる年齢です。

こういうことを実感するために、ときにはこんな昔ながらの行事を、昔ながらの場所でしてみるのも意味のあることかもしれません」

*

五十年前のあの日のことで、私の記憶ではなく、いどむが典子からきかされたこととして伝えられたことがある。ひょっとして私も聞いたことがあるのかもしれないが、全く記憶にない。知らされていたらこんなことを忘れるはずがないと思うのだが…。

それはお開きになって帰宅したときのことだそう。伊吹(妻の旧姓)の両親が、「団さんは利喜三さんのご実家、西田さんの縁者やなあ…」と語ったのだと言うのだ。

典子とは同志社大学の心理学専攻の同窓で、私が結核で1年留年したことで卒業時に同級生になった。戦後生まれの多くがそうであったように、そこからの恋愛結婚と言うカテゴリーだ。ところがその相手が、私の家と古いつながりの中にあっただと言うのだ。

どういう事かというと、1885年生まれの私の祖父(留吉)は、大津の西田さんという商店で、丁稚の頃からお世話になっていた。そしてその西田家の主の三男が、1930年頃に伊吹一族の家に養子に行き、典子とは親戚関係にあったのだ。だから典子の両親は、大津の西田家の事をよく知っていた。同じように、私が高校生の頃に亡くなった私の祖父も、その後わたしが結婚することになる京都の伊吹家のことを知っていたことになる。

私の祖父からすると、世話になった店の主の坊ちゃんが養子にいった先の一族の娘さんを、自分の孫が妻に迎えることになったのだ。その結

婚の時まで生きていたら、何と言っただろうか。

もう近年では家柄だとか身辺調査等と古典的で差別的なことを口にする人もなくなった。しかし、当時はまだ、一概にそうも言えなかった。典子の両親が対面の場でそのようなことを口にしなかったのは適切だった。伊吹の両親は、家の格などということに全く思いがないというわけではない人だった。

しかしそれにしても、そんなつながりが私と典子の背景に存在したのは、今になって思うと不思議なことだ。NHK「ファミリーヒストリー」を見ていると、日本の夫婦の多くが夫の姓を名乗っていることが多い。どちらにするか、夫婦別姓を戸籍法が認めていない状況では必須決定事項だ。昔のことだから妻は当然のように団典子になった。

しかし旧姓伊吹典子。この「伊吹」にもファミリーヒストリーは当然あって、番組でも母方のルーツを探ることも同時並行的に行っている。

いどむの調査

「調査してみて分かった事は、昔と比べるとネットで調べられるようになって、いろんなデータがそこに挙げられている。ネット検索で何か出てくるような名前や人、家なら、他でも資料を当たることが可能だ。しかし誰も彼もがネット検索で辿っていけばルーツにたどり着くというものでもない。

明治10年ごろから定期刊行されている紳士録も、現在ネットで調べられる。国会図書館には揃っていて、行けばコピーもできる。発刊から50年以上経ったものなら、著作権が切れているから、検索して自宅のPCでコピーも可能だ。

国会図書館にはいろいろなものが収蔵されていて、19時まで開いているので調査の助けになる。印刷の受付は18時までかな。

「そういうことって行って初めてわかることやる? 試行錯誤にめげんのやねお前」

「名前検索から始めて…、今はとにかくネットがす

ごいよ。事前にそこでアタリがつけられるから、現地に行ってみても、はずれ、空振りは少ない。

この前も国会図書館で「朽木家」のことを調べていたら参考になるものがあつた。閲覧申請で出てきた本のデータをネットで調べたら、発行元がわかった。市販品かと思ったら保存会のような所の自費出版的な本だった。取扱店が二軒あって定価5000円。これが京都府福知山市の出版社。電話で代引き注文して手に入れた。

これは、五月(さつきさんは団久子、士郎の母の母つまり母方祖母)の出身家族を調べる手掛かり。

「桐村弘文堂って知ってるよ。文房具とか印刷、本屋のような。昔京都府の児童相談所に勤めていた時、福知山には10年余り住んでいたもんなあ。いどむは小学校入学早々までそこで育ったやん。

でも住んでいた11年間にこんな話題をした記憶がない。だから私たちは誰も知らなかったのだと思う。いやいやそういえば今、大河ドラマでやっている明智光秀は福知山城主だった時期があつて、藤竹のおばあちゃん(五月さん)はその縁の末裔だとか聞いたような気もする。

この話を、今回入手した本で改めて調べてみると、どうやら戦国時代の城主・明智光秀ではなく、その後の江戸時代に福知山藩主となった朽木家の末裔だったということが確認できた。しかしながら、いろいろな記録が残っているものだ。

*

社会的な立場、役職にあつた人は公式記録に残っている。私の母の原家族、「藤竹」は藤竹信之(母方祖父)が日本陸軍の職業軍人であったために、その記録が残されることになった。

私にこの祖父の記憶はほとんどない。葬儀に出席したのが1番の記憶だ。京都市下賀茂の教会で行われたその場で、就学前の私が牧師の言葉を受けて、大声でそれを繰り返したと笑い話にされたことだけ覚えている。

教会での葬儀だったことが、ずっと後になって不思議な気がした。クリスチアンの一家だったわけではなく、祖父は歳をとってから自分1人洗礼を受けてクリスチアンになったと聞いた。理由は知らない。誰かが話しているのを聞いた記憶もない。土郎の母が生きてるうちなら、その事情を知っていたかもしれないが、話題になった事はなかったと思う。

近年、関心を持ち始め、第一回で取り上げた母方祖父の兵籍簿のことが強く気になりだした。出身は熊本の人。熊本の名門、旧制中学済々黌から陸軍士官学校に入り、その後、陸軍大学校に入学している。陸軍大学校受験資格は、隊付き勤務二年以上の中尉と少尉だそうである。陸軍大学校の在籍者名簿や、その後の事は「日本陸軍」の配属地ルートから調べるといろいろなことがわかるらしく、いどむが膨大な資料を発掘してきてあれこれ話してくれた。

熊本・中学済々黌からは多くの陸軍大学校入学者を出しているらしい。その中には陸軍大将、中將、少將に名を連ねる人が多い。母方祖父も陸軍少將が軍歴最終肩書である。藤竹信之は49歳で予備役となり、京都に暮らし銀行員になった。そこで5人の子供を育てた。

團家

「團の家は商売人やん。だったら團家の事なんか出てこないよね。そういう記録はどうなの？同じルーツ探しでもずいぶん調べ方が違うことになるね」

*

少し余談。私の現在の戸籍名は団 士郎である。結婚するまで、正式には團士郎だった。婚姻届を出す時、それまで様々な場で書き間違えられてきた「團」ではなく、間違いのない「団」にした。合理的な考え方からの選択である

同時に本籍はいつも、現住地に移して今に至

る。世間には、ながらく訪れたこともない土地に、ルーツだと言うので本籍を残している人が多い。公式手続き等では本籍地の謄本が必要だったりするから面倒なだけだと思うのだが。

私は姓の漢字表記も本籍地も合理性を採ったことになる。大したいわれもない家柄や、先祖話に心惹かれていたわけではない。むしろ逆の考え方をするタイプだ。

*

團家のことを、兵籍簿ルートではなく、仏壇の引き出しから出てきた過去帳なるものに登場する人名をたどっていくと、福井県小浜から大津への流れが登場する。

商売をしていると税金、屋号、商工会の記録等に、必ずではないが登場する。納税記録等でも出てくる。サラリーマン勤め人では登場しない。

さらに團家を深掘りできた理由は、出身が武士だからだ。家系図のことなど他の人と話してみると、「うちは農民の出だから、苗字もクソもない！」という話もあった。

西暦1900年までくらいなら、いろいろネット検索で調べることが可能だ。100年くらいは誰でもたどれるが、それが限界ということになる。

今、先祖の調べ方がブームで、そんな本も出ている。これまで2度くらい世の中にブームがあって、最近のは3回目のブームらしい。お寺に聞いてみたり、親戚に手紙を出してみたりすると分かることもある。十通に一通も返信はないだろうけど、何か話したいことがある人もいる。出身地、宗派、同宗派の寺に手紙で、こういうことを尋ねてみるのも方法。

*

「それで、調査はその後どうなった？」

小浜の清厳寺跡で話を聞いた後、小浜藩・酒井の殿様のお城近くを歩いてみると、城跡のすぐ近くの神社に奉納された絵馬と並んで、屋敷地図がかけられていた。その名前の中に團家があって、どの辺りに屋敷があったのかを推定できた。

その地図の記載を見てみると、向こう三軒両隣の藩士の姓も分かり、そこに興味深い名前があった。

三軒隣りの矢部家の次男は、のちの梅田雲浜と名乗る人物。先進的な考え方をする若者で、彼は家を出て、地元を離れた大津で私塾を始めた江戸末期の儒学者。最終的には安政の大獄で摘発され獄死することとなった。その功績を記念した石碑が大津市に建立されているが、その場所というのが、私(士郎)が通学していた大津市立長等小学校の北校舎と呼んでいた校門の横なのである。

六十年以上前の事だから、その間、校舎新築などを経て、私の通学時代に今の場所にあったかどうかは定かではないが、そんな縁の存在を発見することになった。

江戸末期から明治にかけて、小浜藩の武士でいるという事は、「麒麟がくる」みたいな戦は全くやっていない。もっぱら藩の経済活動従事である。

團家の記録文書には、高島(近江)の代官を命じられた事が書かれているものがある。滋賀県内に小浜藩の領地があったのだ。そこで小浜市史に記載された高島代官所を見てみると、現在の滋賀県の高島市、琵琶湖畔に小浜藩蔵屋敷のあったところを発見することができた。今は更地になっているがそこで代官を幕末の頃の数年間勤めていたことがわかる。南船木という場所で、藩の交易をしていたようである。



その後、明治維新の大転換で小浜から高島に来ていた團家はしばらく後、長男(雄太郎)が大津に出て商売をすることになる。

若狭湾、福井県小浜市、滋賀県高島市、大津市、そして京都の位置関係を地図で示しておく。